

優秀賞 [大学生の部]

地域力結集で実現する『中継ぎ保育』の拡充

東京医科大学 医学部3年

岩間 優 いわま ゆう



独自のインタビュー調査で「働く母親」のニーズを把握し、地域の中の「中継ぎ保育室」という提案につなげた点に説得力がありました。育児支援を出発点に、学生の活用、地域の活性化、医療との連携など、豊富な具体案も評価されました。

1. はじめに

政府により、社会での女性活用策が採られてきている。しかしながら、とりわけ働く女性にとって、子どもを産み、育てながら仕事を継続することは、未だに様々な悩ましい現実問題がある。

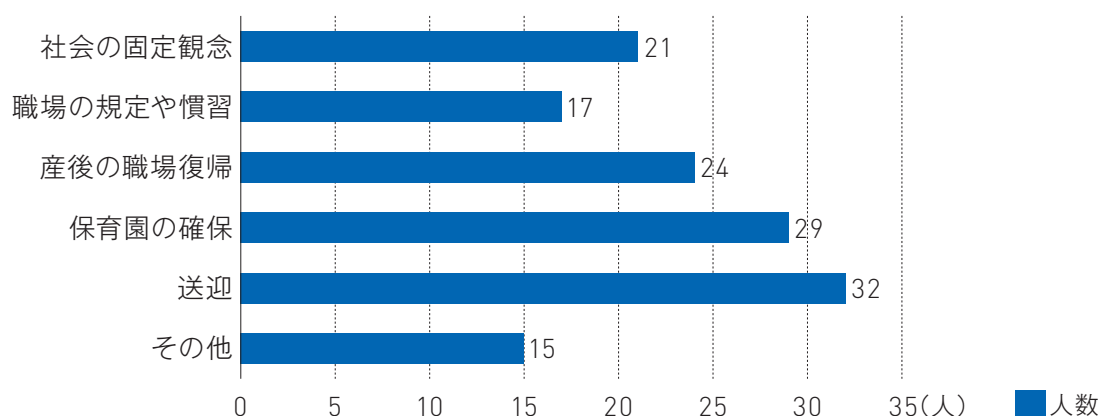
女性がいかなるライフステージにあっても、いきいきと働き、家庭生活を営むことができるようになることは、これからのグローバル時代に日本がさらに飛躍するために最も重要なことだと私は思う。以前に私が台湾でホームステイをした家庭のホストマザーは、仕事と家庭を両立し、キャリアを積んできた女性だったが、台湾では共働き家庭は一般的で、専業主婦はごくまれだという。子育ては母親だけの負担ではなく、家族はもちろん、地域の皆で子どもを見守っている印象を受けた。

これまでの「家庭か仕事かのどちらかの選択」という固定

観念を『壊し』、仕事のやりがいや家庭での生きがいを『守り』、「家庭と仕事の両立」が当たり前の社会環境を『創る』。それによって、男女共により働きやすい職場環境になり、さらには家庭生活もより充実することで、子どもを産み、育てやすい社会になる。そのためにも、働く親の「保育、育児の困った」をすべからず解決しなければならない。

いみじくも今年度から「子ども・子育て支援新制度」が実施された。消費税率引き上げにともなう財源が充てられ、地域型保育給付も創設された。地域の実情に応じた子育て支援を、これまで以上に地域の力で活性化させたい。次世代へ向けて保育サービスを量的に拡充し、保育支援の提供手段を多様化するために、かつて日本の地域文化を築いた相互援助を手本とした方策について提言したい。日本の絆文化が子育て支援制度の世界標準となり得る夢を描きたい。

図1 仕事と家庭の両立における問題点



都内在住在勤の仕事と家庭を両立している母親 50人に対する聞き取り調査 (2015年4月21～23日実施、自由回答・複数回答あり) をもとに筆者作成

2. 仕事と家庭を両立する母親たちの現状

ワークライフバランスをより現実的なものにするためには、公助はもちろん、地域での共助、家庭内での自助の三位一体で整備される必要がある。しかし、現実には保育園や託児所なども不足しており、育児にあたる女性への支援は不十分だ。地域では子どもの声が騒音にされるなど、公共の場でのおおらかで寛容な配慮は乏しく、家庭での男性の理解や協力を欠く場合もしばしばある。さらに、社会での仕事や育児についての根深い固定観念があり、それを修正するのは容易ではない。

このことは、今回、私が実施した働く母親への聞き取り調査の回答からも明らかで、課題が山積している(図1参照)。調査の詳細は以下の通りである。

*インタビュー対象：未就学児・小学校低学年児童を持つ都内在住在勤の、仕事と家庭を両立している母親 50人(20代12人、30代24人、40代14人)

*インタビュー内容：育児、保育など仕事と家庭の両立における問題点(自由回答・複数回答あり)

*インタビュー方法：2015年4月21～23日の3日間、東京都文京区本郷住宅地の保育園、幼稚園、小学校、駅周辺にて聞き取り調査

●社会の固定観念の問題

○男性優位の社会で、女性が子どもを持ちながら働くことに理解が得られない場面がある。○家事や子育ては女性の役割という考えが根底にある夫の協力を得にくい。○子どもが小さいときに園に預けるのは可哀想だと言われる。

●職場の規定や慣習の問題

○労働時間に規定があり、家庭の都合に合わせて柔軟に勤務対応できない。○長時間労働が慣習のようにになっている。○残業や休日出勤も頻繁にある。長期休暇が取りにくいので、子どもとの夏休みなどの過ごし方が悩ましい。

●産後の職場復帰の問題

○元の職場や役職に戻れないうえに、子育てをしながらでは職場に迷惑をかけがちで、居づらい雰囲気があった。○産休、育児休暇の間に進化している職場環境に遅れをとってしまった。○幼児はすぐに熱を出すので、職場を休みがちになってしまう。仕事が休めないときに病児、病後児の預け先が見つからない。

●園の確保の問題

○子どもを預ける保育園が定員オーバーでなかなか見つからなかった。下の子が上の子と同じ保育園に入所できずに、違う保育園になってしまい、送り迎えが大変になった。

●子どもの園への送迎の問題

○シフト制の仕事のため、早朝・深夜の勤務のときの園以外の

預け先を探すのが難儀だった。○駅から家からも遠い園に通っているため、出勤時・帰宅時の園への送迎が困難。

○特に週明けの月曜日は園で使用する荷物が多く、出勤前に朝から大荷物で園に送りに行くのが重労働。○園で病気になったときの急な迎えの要請に対応できない。○仕事が終わらず当日急に残業になってしまったときに、迎えに行く代理人が見つけない。○園が終わった後に習い事の場所まで送ってもらうことを頼める人がいない。

●その他

○平日の行事に仕事の都合でなかなか参加できない。○シングルマザーのため、1人での仕事と家庭の両立が時間的に厳しい。○子どもが発達障害のため、預かってもらう先を見つけるのが困難。

聞き取り調査の結果、働く母親の悩ましい問題として、園の送迎や、園や小学校の学童保育後など親が帰宅するまでの子どもの預け場所についての声が多く挙がった。そこで、解決の一助となるシステムを身近な地域の中で整えることが急務だと実感した。そこで、分園的存在の保育室を拡充させ、地域で支え合う制度を提案する。

3. 保育の受け皿を拡大する中継ぎ保育室の増設

待機児童をなくす施策に公が取り組むことは必須だが、それだけでは子育て支援は十分とはいえない。そこで、本園とは別の、地域密着型分園の中継ぎ保育室が有効になる。

保育室については、官民間問わず既存の地域施設の一角や空き家の自治体での借り上げなどによって確保し、自治体に申請し、登録する。

中継ぎ保育室は、保育園や幼稚園、認定こども園の本園の補完的な役割で、本園の活動と連携し、協力する。また、保護者の意向を受け止め、一人ひとりの状況を考慮して、保護者支援を行うものとする。地域の家庭的保育事業、事業所内保育事業など、認可外保育とされている既存のシステムの利点を取り込みながらも、それとは別の形でもっと地域住民が関わり、分園の保育室の創設による地域興しを目指すものとする。

地域住民の子育て支援に関する理解を得るためには、自治体の取り組みだけに頼らず、より地域密着型に特化して推進することを提案する。例えば、管理は自治体でも、運営は町内会やNPOなど小さなユニットから関心を高める活動を実施する。小規模単位でのコミュニティにおけるリーダー的な存在が活動を主導し、子どもを預かる人材を増やし、マッチングでの依頼者の選択肢を増やす。それによって、本園への送迎など保護者の細かい要望にも、常時あるいは非常時でも即時対応しやすくなる。基本的には依頼者対支援者は1対1対応とするが、預か

る保育室では複数の子どもの居場所を確保することで、閉鎖的な環境にしない。

さらに、中継ぎ保育室を地域の子育て交流の拠点として機能させることもねらいとする。そこでは、子どもにとっても二重保育のストレスから解放される家庭的なくつろぎの場であることが望まれる。親同士が互いに子育ての情報を共有するなど、育児の悩みを解決できる場、家族ぐるみの交流ができる場とすることを目指す。地域の世代間交流の場としても生かしたい。

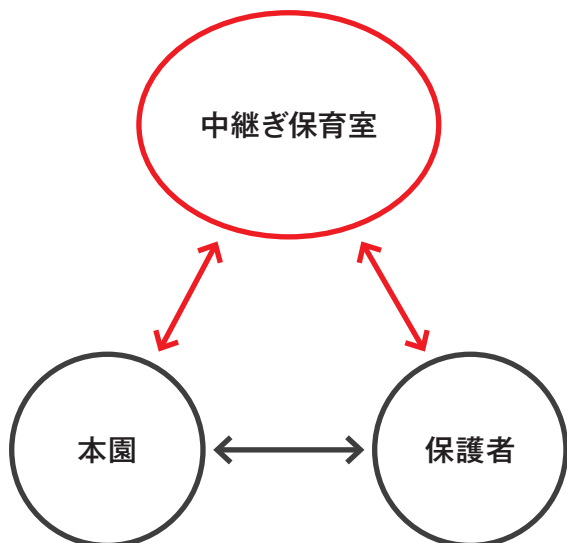
必要に応じて、特定の保育室には、子どもや家族の健康を見守るために地域の医師、看護師、栄養士などの専門性を生かした体制を整える。定期的に専門職員による健康セミナーや育児相談ができる機会を設け、親の悩みや不安を解消するなどの援助も実施する。例えば、産婦人科医師による産前産後のケアや、不妊治療の相談や子どもの栄養相談にも対応するなど、安心して子どもを産み、育てられる地域づくりを実現させ、少子化対策も推進する。このような社会的意義を中継ぎ保育室の付加価値とする考え方だ(図2参照)。

4. 保護者と地域住民との協働による運営

① 子育て支援の担い手を多世代で増やす

安全な環境の中で子どもの成長を見守る人材を育てることで、地域コミュニティも活性化するきっかけとなる。支援する人材を増やすために、保育や福祉、医療を学ぶ学生の実習の場としての活用を促し、大学や専門学校の単位として認め、「地域創生枠」を設け、子育て支援に参加する学生に無利子奨学金を優先的に支給する仕組みを作る。さらに各自治体と地域の企業

図2 中継ぎ保育室の位置づけ



が基金を作り、卒業後に地元で就職するなどした学生の奨学金の返済の一部を免除する取り組みを作る。また学生に限らず、子育て支援員として参加することで、定められた報酬の他に自治体交付による地域の商店で利用できるポイント券が付与されたりするなど、支援者へのメリットを増やし、地域の経済活性も促す。支援に対するモチベーションを上げ、結果として『人の役に立つ』という社会的意義を実感することで、やりがいも生まれる。

支援者としての経験者が新たな支援希望者に対して講習、アドバイスを指導し、支援者を増やす連鎖の仕組みを作る。支援者は登録制にして、依頼者からの要請を仲介する機関からの要請によって、必要に応じて職務にあたる。

② 安心・安全の維持

子どもの預け先で生じるのが、安心・安全への不安だ。そもそも他人に子どもを預けることへの不安は、互いのコミュニケーション不足による信頼感の欠如に起因するものだ。海外に目を向ければ、外国人ベビーシッターを付けて子育てをしている母親は実に多い。先の私の台湾でのホストマザーもそうであったが、「互いをよく知り、納得したうえでの契約なので、特に不安はない」と語っていた。このことは多様性を受け入れている証であるとも感じた。地域に多様性を確保するためにも、老若男女問わず多様な背景を持った人たちが地域の子育てに関わることは望ましいはずだ。日本ではまだそのような意識は持ちにくいとしたら、両者のマッチングを管理、調整する機関が、依頼人と支援者それぞれの要請をきめ細やかにすくい上げるシステムを作り、両者で承認する契約を交わす(その際は必ず第三者が仲介すること)で安心・安全を保証する。そのうえで、両者がコミュニケーションを密にし、互いを知ることで警戒心を解き、信頼を得ることで不安を解消する。なお、保育士以外の保育支援者は、必ず定めによる研修を終了した者とする。研修後も地域のイベントとして子育て支援学習会などを開催し、支援者の技量のレベルアップのための機会を設け、同時に依頼者も参加することで、相互間で絶え間なく意識向上に努めるようにする。両者の要望に添った安心・安全な運営も、地域での小単位での取り組みだからこそ可能となる。複数人の支援者による複数の目が見守ることで、互いに安全性を高め、実績のある保育士が適時地域を巡回するようにする。支援者と依頼者との信頼関係が築けた後も、緊張感のある関係を維持できるような仕組みであるように仲介機関は常に目配りをする。

5. おわりに

必要ときに安全で便利な子育て支援サービスを受けられるシステムが拡充、完備されれば、働く親はストレスが減り、余

裕を持って家庭と仕事の両立ができる。既存の保育ママとも違う、複数の支援者とその依頼者が集う学童保育の乳幼児版保育室で、幼少のときから地域の多様な人たちとふれ合いながら顔見知りを増やし、成長する機会を得る。日常的な地域交流の中で、子どもたちが見守られて育つ環境を作ることも可能になるだろう。

それによって、子どもたちには地域愛が芽生え、将来、地域に恩返しをする思いが芽生えるきっかけにもなるかもしれない。

医学生の際は、将来医師となったとき、地域の医師が街づくりでも中心的な役割を果たすことが期待されると予想する。そこで、中継ぎ保育室を地域の病院や診療所などの医療機関の一角に設け、地域の「かかりつけ医」を中心に、特に病児・病後児の保育の安心を得られる環境作りの具現化を進めたいと望んでいる。地域の小児科医のネットワーク作りや、かかりつけ医の推奨、予防についての地域学習会なども実践したい。医療、育児、生活サービスなどを切れ目なく提供する地域包括ケアシステムの拡充は、今後ますます重要になるはずだ。

日本の中継ぎ保育の拡充で、子育て支援制度を確立し、世界のスタンダードとなるシステムとして構築したい。

参考文献

- ・ 厚生労働省「保育所関連状況とりまとめ」平成26年4月1日
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000057750.html>
- ・ 厚生労働省「子育て援助活動支援事業（ファミリー・サポート・センター事業）について」
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/ikuji-kaigo01/>
- ・ 東京女子医科大学 男女共同参画推進局 女性医師・研究者支援センター
ファミリーサポートの概要
<http://www.twmu.ac.jp/w-support/syusanki.html>
- ・ 相馬範子『保育の現状と子どもの未来』、脳の育ちと子育ての科学シリーズ、東洋書店、2013年
- ・ 近藤幹生『保育とは何か』岩波新書、2014年
- ・ 武藤安子・吉川晴美・松永あけみ編著『家庭支援の保育学』建邦社、2010年
- ・ 関口はつ江・太田光洋編著『実践としての保育学 現代に生きる子どものための保育』同文書院、2009年

[受賞者インタビュー]

自分が医師として働くときに 直面する問題を 考えたかった



——コンテストに応募した理由、きっかけは？

私が将来、医師として働くときに直面するであろう家庭と仕事の両立を考えると、悩ましい課題のひとつである子育てを支える社会の仕組みについて考察したいと思ったからです。

——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

約1カ月かかりました。

——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

働く親たちの困難に関する現状を知るため、保育園に送り迎えに来る方々に聞き取り調査を行ったことです。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の考えをまとめ、他者に示す事ができたことです。

——今、どんなことに興味を持っていますか？

ICTを活用させて、地域包括医療システムを構築することです。